

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年 4月 26日

派遣者氏名（専門分野）	■■■■■（ 演劇学 ）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	日本演劇とシェイクスピア上演との異文化的接触研究
--------------	--------------------------

派遣期間

2011年 1月 28日 ～ 2011年 3月 28日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	イギリス	ロンドン	ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校	エリザベス・シャッフアー教授
	イギリス	ロンドン	ヴィクトリア・アルバート博物館演劇資料室	ケイト・ドーニー博士
	イギリス	ストラットフォード・アポン・エイヴォン	シェイクスピア・センター・ライブラリー及びアーカイブ	マデリン・コックス教授
	イギリス	ストラットフォード・アポン・エイヴォン	シェイクスピア研究所附属図書館	ケイト・マクルスキー教授

派遣先で実施した研究内容

<p>1. ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校演劇科のエリザベス・シャッフアー教授の勧めで、以下のクラスに出席、聴講した。</p> <p>①『オセロー』を用いたワークショップ ローラ・ヒギンズ講師とディアナ・ランキン講師それぞれの授業に参加した。 この授業では、まずいくつかのテキスト批評が講師によって予め用意され、学生がそれら批評の中から、自身の上演にふさわしいものを選び、自身の解釈と照らし合わせながら、再度討論を行なう。次に、その解釈を明確に表現できる場面とせりふをテキストの中から選び出し、それらを用いて即興で演技の練習を始めた。最終的には、グループごとに演技の発表を行ない、意見交換となった。</p> <p>②『リア王』を題材とした上演及び研究発表 4回生の学生による、『リア王』のせりふを用いた20分程度の上演がなされ、その後彼らの『リア王』の戯曲解釈と翻案のプレゼンテーションが30分程度なされた。演劇科が所有する小舞台を用いて行なわれ、学生達は舞台装置、衣裳、プレゼンテーション用パンフレットを用意し、舞台照明に関してはプロフェッショナルの照明が入っていた。2作品を観劇。</p> <p>③上記『リア王』発表後の演劇科教授陣による、審査の場に出席。</p> <p>④『十二夜』を用いたワークショップ 最初にシャッフアー教授による上演史の講義があり、その後グループに分かれて戯曲の読みあわせを行ない、上演のコンセプトを討論し、実際の即興上演までを行なうといった授業。</p>

2. ヴィクトリア・アルバート博物館演劇資料室において、蜷川幸雄演出シェイクスピア上演を中心に、劇評やパンフレットを可能な限り収集した。

3. ロンドン在住のシェイクスピア俳優ジェマ・ジョーンズ氏と会談し、ピーター・ブルック演出、エイドリアン・ノーブル演出、ニコラス・ハイトナー演出、サム・メンデス演出の舞台経験について聴く。とりわけ、演技者としての立場からのシェイクスピア理解、及び現行のロンドン演劇状況を拝聴した。

4. シェイクスピア・センター・ライブラリーにおいて、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーによる上演のビデオ映像を見た。とくに8月の発表で取り上げる『ペリクリーズ』の公演資料を中心にみる。RSC公演による『ペリクリーズ』の資料は、1989年及び2006年の舞台資料（写真、上演台本）を閲覧することができた。

現在とりわけ研究対象として扱っている『ペリクリーズ』において、複雑なプロットを演出家がどのように処理したのかに最も関心があるため、これら舞台資料を見ることができたことは、私にとって大きな価値があった。RSCの演出家たちは、舞台装置を大掛かりなものにしたり、登場人物がテキストにはない演技をすることによって、『ペリクリーズ』の複雑性を処理していた。日本人演出家による上演との明らかな違いが視覚的資料で確認できた。

5. シェイクスピア研究所において、上演資料に関する論文を収集した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の2ヶ月に及ぶ在外研究では、当初予定していた以上の成果をあげることができた。

初めに、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ校では、大阪大学大学院文学研究科の招聘研究員として、エリザベス・シャッフアー先生のご指導の下、授業を聴講できただけでなく、演劇科の先生方と交流することができた。この交流は、非常に刺激的であっただけでなく、演劇科の教育現場を目の当たりにすること、つまり、戯曲分析、批評、上演研究、実践という一連の流れを見ることで、自身の研究である上演研究について再度考察する経験を得た。

次に、ヴィクトリア・アルバート博物館であるが、蜷川幸雄演出による上演のロンドン公演資料が豊富にそろっており、80年代～昨年にかけての劇評、写真資料を収集することができた。

ストラットフォード・アポン・エイヴオンに移った後訪れたシェイクスピア・センター・ライブラリーでは、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーによる上演の資料を収集することができた。とりわけ、予定以上の収穫であったのは、舞台写真を購入できたこと、視覚映像が保存されており閲覧できたこと、さらに演出台本が保存されており閲覧できたことがあげられる。これらは、今夏予定されている自身の口頭発表を皮切りに、研究資料として長く用いることができるものである。

派遣後の研究発表の予定

2011年8月、大阪大学で開催される国際演劇学会（The International Federation for Theatre Research）で口頭発表することになっている。発表申し込みはすでに承諾されている。